

京都府田辺町

新宗谷遺跡発掘調査概報



1994

田辺町教育委員会

序

本町の南部には、国宝十一面観音を本尊とする観音寺があります。この寺は天武天皇の勅願と伝えられ、当時は普賢教法寺と呼ばれていました。この普賢教法寺が地名として残っているのが、現在の普賢寺地域です。中世には関白近衛基通の隠棲した所としても知られますが、この普賢寺谷は山城の一乗谷と呼ばれるほど多くの城館跡が認められるところでもあります。

今回の報告は、この城館跡群のひとつである新宗谷遺跡しそがたにの一部を調査したものです。

調査により、遺跡は中・近世のみでなく、平安時代末期にも何か利用されていたらしいことがわかりました。

最後になりましたが、調査にあたって、有限会社ウエナカ・関係機関をはじめ多くの方々のご協力・ご指導をいただきましたこととお礼申しあげるとともに、今後とも埋蔵文化財に対しご理解たまわりますようお願い申し上げます。

平成6年3月

田辺町教育委員会

教育長 吉 山 勝 平

例 言

- 1 本書は、田辺町教育委員会が行った京都府綴喜郡田辺町字多々羅小字中垣内45番地ほかに所在する新^{しもがたに}宗谷遺跡発掘調査の概要報告である。
- 2 調査は有限会社ウエナカ（代表取締役 藤室昭）の依頼を受け、平成5年度事業として実施した。
- 3 現地調査は平成5年7月12日に開始し9月3日に終了した。
- 4 調査の組織は次のとおりである。
調査主体・・・田辺町教育委員会
調査責任者・・・田辺町教育委員会 教育長 吉山勝平
調査指導・・・京都府教育庁指導部文化財保護課・京都府立山城郷土資料館・同志社大学校地学術調査委員会・田辺町文化財保護委員会
調査担当者・・・田辺町教育委員会 社会教育課 鷹野一太郎
同 中井 英策
調査事務局・・・田辺町教育委員会 教育次長 中川 勝之
同 社会教育課 課長 奥西 安己
同 課長補佐 木下 敏己
同 社会教育係長 小西ケイ子
調査参加者・・・岩本貴・細辻嘉門・辻谷真夕・植西美津子・原クニ江
- 5 調査を実施するについて、有限会社ウエナカ・株式会社東洋美装工業・同志社大学には多大のご協力を賜った。記して感謝します。
- 6 調査期間中及び本書を作成するにあたり、次の方々よりご教示を得た。記して感謝の意とします。（敬称略・順不同）
高橋美久二（京都府立山城郷土資料館）、鈴木重治・辰巳和弘（同志社大学校地学術調査委員会）
- 7 本書の執筆・編集は鷹野・中井が行った。

目 次

1 はじめに	1
2 位置と環境	2
3 調査概要	4
4 出土遺物	9
5 まとめ	10

1 はじめに

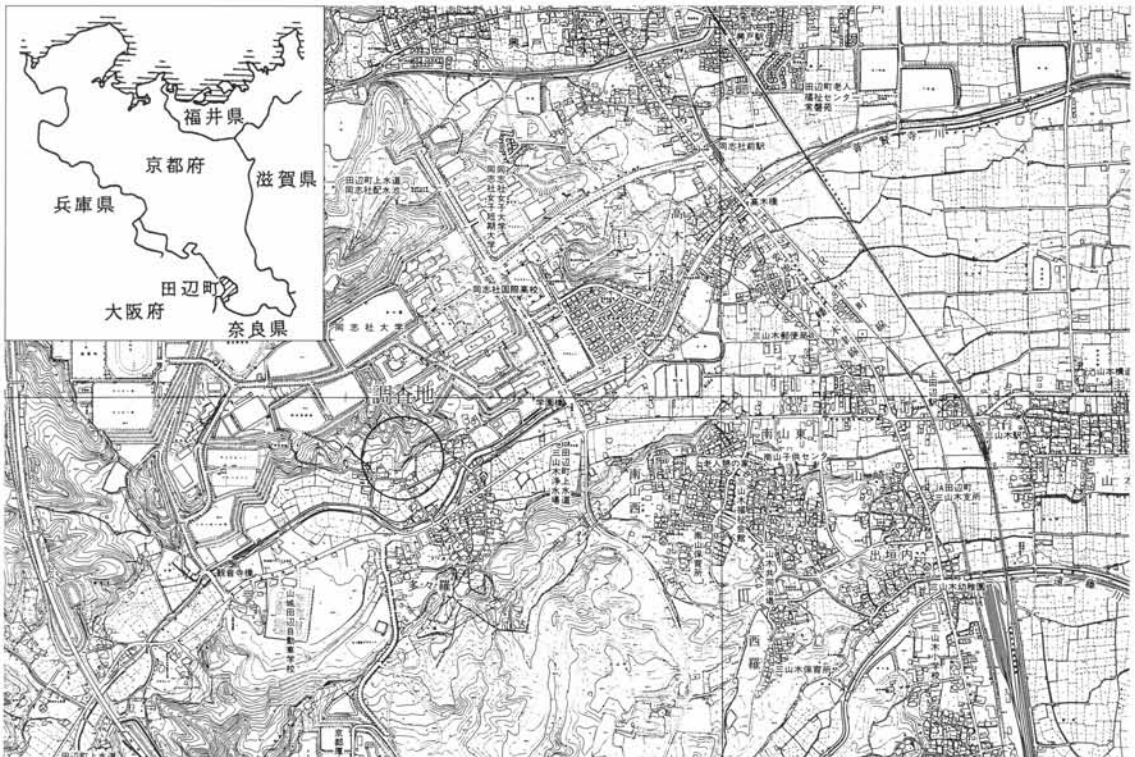
^{しそがたに}新宗谷遺跡は京都府綴喜郡田辺町字多々羅の普賢寺川左岸に位置する、中世末から近世初頭の城館跡として知られている。城館の主要部分は同志社校地内に広がり、平坦面・土塁・空堀・井戸・通路等が緑地保存されている。

有限会社ウエナカでは、田辺町字多々羅小字中垣内45番地に駐車場造成を計画され、田辺町教育委員会に埋蔵文化財の有無を照会した。当委員会では、該当地が新宗谷遺跡に含まれている可能性が高く、文化財保護法第57条の2に基づく届出を求めた。

平成5年5月28日に業者と現地を確認したところ、造成区域に城館先端の小削平地がほぼ完全に含まれていることがわかった。また、この部分の周囲は垂直の崖になっており、切土を行いたい旨であった。このため、事前の発掘調査が必要であることを伝えたところ、6月7日に当委員会あてに発掘調査の依頼がなされた。

現地調査は平成5年7月12日に開始し、9月6日に終了した。

なお、有限会社ウエナカをはじめ関係者の方々、ご指導・ご協力くださった皆さま、調査に従事された諸氏等多くの方々の協力によって今回の調査が行われたことをここに記して感謝の気持ちとしたい。



調査地位置図 (S = 1 : 20,000)

2 位置と環境

田辺町は、京都府南部に広がる南山城平野のほぼ中央に位置し、町の西部は生駒山系に連なる京阪奈丘陵を界して大阪府・奈良県と接し、東部は北流する木津川によって形成された沖積平野が広がる南北に長い町である。

新宗谷遺跡は、田辺町南部の普賢寺谷にある。この谷筋は京阪奈丘陵から平野部に開くいくつかの谷のひとつで、谷の中央を木津川の支流である普賢寺川が流れ、平地部は幅約200m、長さ約3.5kmを測る。

この谷を歴史的に概観してみよう。

谷の西奥、天王からは旧石器時代に遡るサヌカイト製の石核がみついている。これは田辺町最古の遺物でもある。続く縄紋時代のもは未発見で、弥生時代後期の高地性集落が谷入口付近の北側に営まれる。現在同志社校地内に保存展示されている田辺天神山遺跡である。(対峙する南山地区からも同時期の遺物が、またその西側の口駒ヶ谷遺跡からは中期の土壙が遺物とともにみついている。)

古墳時代前期・中期の遺跡は未確認であるが、後期になると天王にシオ1号墳(平塚)が築かれる。墳形はよくわからないが、横穴式石室を内部主体とし、石室の天井石も残っているものである。かつては周辺に数基あったらしい。ほかに王居谷古墳群・御家古墳などがみられる。終末期では下司古墳群・大御堂裏山古墳が知られ、ともに同志社校地内に保存されている。下司古墳群は、2度の調査が行われ総数8基を数えることができ、いずれも横穴式石室を主体部とし、7世紀前半に築造されたものとされる。

なお、『古事記』『日本書紀』には、仁徳天皇の皇后である磐之媛が居住したことや、継体天皇の筒城宮が営まれたことがみえるが、具体的な場所については明らかでない。

7～8世紀には、今に法灯が伝わる普賢寺が建立される。寺伝によれば、天武天皇の勅願により義淵僧正が創建し、観心山親山寺(別名筒城寺)と称した。天平16年(744)聖武天皇の勅願により良弁僧正が伽藍を増築し息長山普賢教法寺と号し、十一面観音(現在国宝指定)を安置したという。現在は観音寺となっているが、西方丘陵上には塔心礎もみられ、白鳳時代からの瓦が寺に残る。

7世紀後半には新宗谷窯跡、8世紀前半にはマムシ谷窯跡がそれぞれ須恵器の生産を行っていたことが同志社校地内で確認されている。ことにマムシ谷窯は須恵器焼成中に天井が崩れ、そのまま放棄された状態で調査されたものである。

貞応元年（1222）には、源平争乱時に摂政・関白をくり返した近衛基通が隠棲の地として移り住み、普賢寺の伽藍再興に貢献した。天福元年（1233）にこの地でなくなり、火葬された所を墓にしたという。その地点の調査が行われたが、火葬地の痕跡はみつからなかった。墓は現在自動車学校南西に移築復元されている。



1. 新宗谷遺跡 2. 大切遺跡 3. 興戸遺跡 4. 興戸廃寺跡 5. 田辺遺跡 6. 田辺城跡 7. 興戸古墳群
8. 興戸宮ノ前遺跡 9. 興戸城跡 10. 田辺天神山遺跡 11. 七瀬川遺跡 12. 都谷遺跡 13. 新宗谷窯跡
14. 新宗谷古墳 15. マムシ谷窯跡 16. 新宮前遺跡 17. 下司古墳群 18. 大御堂古墳 19. 館跡 20. 普賢寺跡
21. 大西館跡 22. 王居谷古墳群 23. 城館跡 24. 城館跡 25. 小田垣内遺跡 26. 水取城跡 27. 西平川原館跡
28. 田中遺跡 29. 南山城跡 30. 口駒ヶ谷遺跡 31. 直田遺跡 32. 山崎古墳群 33. 宮ノ下遺跡
34. 三山木廃寺跡 35. 菖蒲谷古墳 36. 奥山田池遺跡 37. 宮ノ口古墳群 38. 宮ノ口遺跡

周辺主要遺跡図（S = 1 : 25,000）

中世から近世初頭にかけては、普賢寺川を挟み谷に延びる小丘陵上に土豪たち（普賢寺衆）の城館が数多く形成され、越前の一乗谷を彷彿させる。これらのなかでは、都谷遺跡、口駒ヶ谷遺跡、小田垣内遺跡などが調査されている。

3 調査概要

トレンチの設定は、調査地が丘陵の先端であり、既に東側と南側が高さ8m程の切り立った崖になっており安全面に配慮した設定とした。

レベルは現地周辺に適切な基準点がなく、田辺町作成地図の天理教久治分教会前三叉路の47.2mを基準として、その北側にある石灯籠のコンクリート台座東南角を47.58mとした。

樹木の伐採は調査前に業者をお願いし、現地調査に際しては、クレーン車で小型重機を吊り上げ、根株・表土の除去を行った。

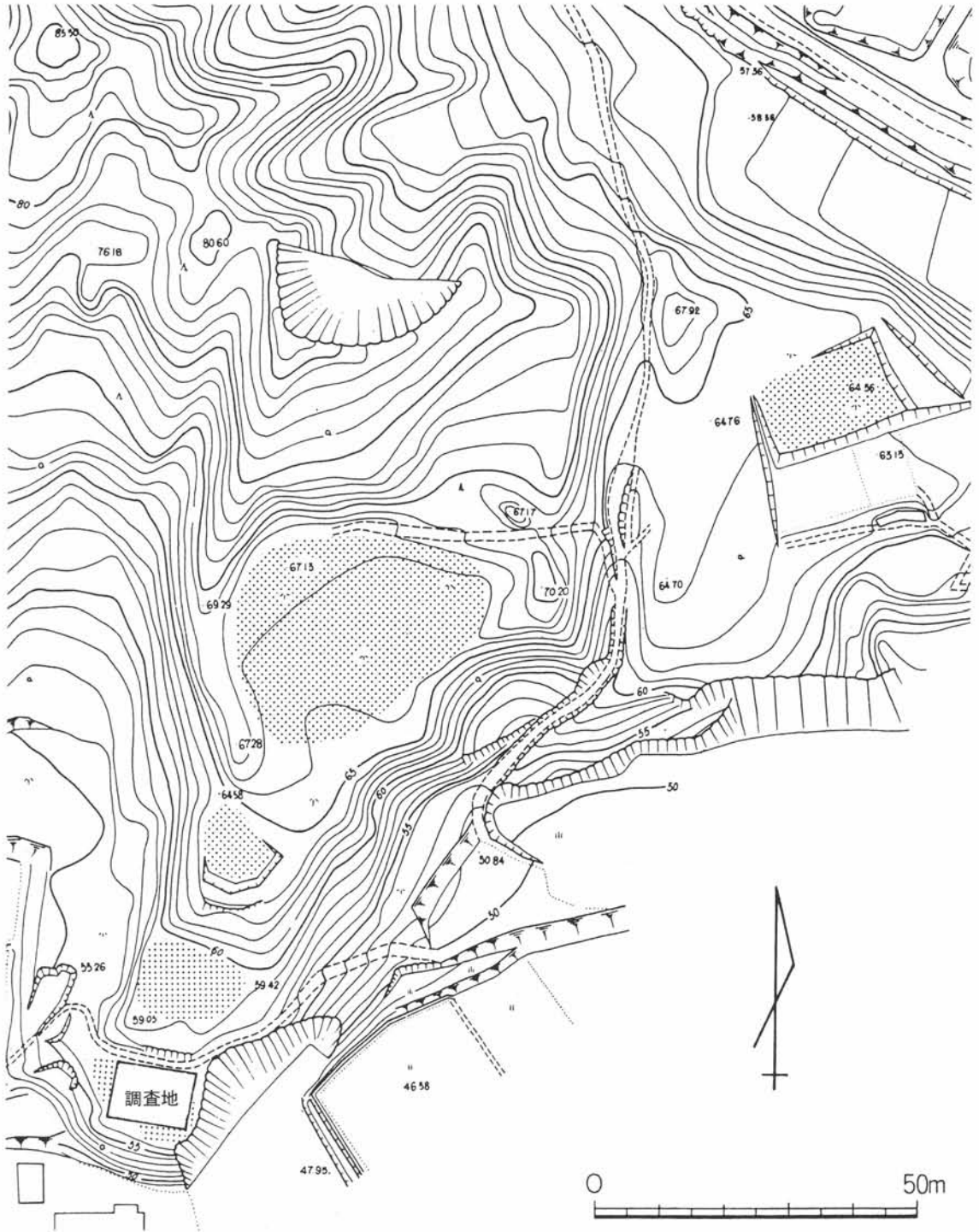
表土直下には汚れた褐色砂質土が、その下に黄褐色砂質土が広がる。この黄褐色砂質土は、細片となった中近世の遺物を含み、平坦面にほぼ均一に広がっているため、近世ある



調査前（西から）

いは近代の耕作土と考えられる。

黄褐色砂質土の下が地山である灰白色粘質土であった。この灰白色粘質土はトレンチ西部で北西から南東方向のラインで傾斜が下がることを確認した。

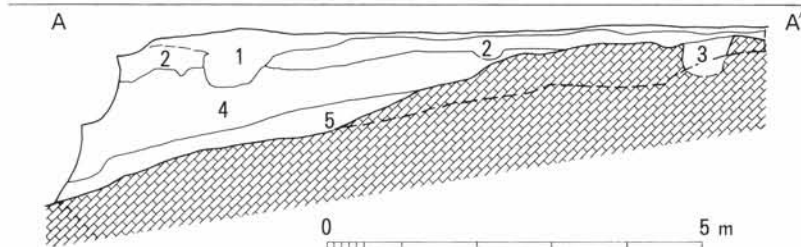


新宗谷郭群配置図（『京都府田辺町都谷中世館跡』掲載図に加筆）



調査トレンチ平面図

L = 57.0m



1. 暗灰色土(表土)
2. 黄灰褐色土
3. 暗黄灰褐色土
4. 明黄灰褐色砂質土(整地層)
5. 暗黄灰褐色粘砂土(整地層)

南北土層断面図



調査地全景（西から）

遺構は地山上面から土壌と多数のピットがみつかった。

土壌は北壁ぎわでみつかった溝状のもので東西4.3m、深さ0.15mを測る。なかから土師器の小ツボがみつかった。

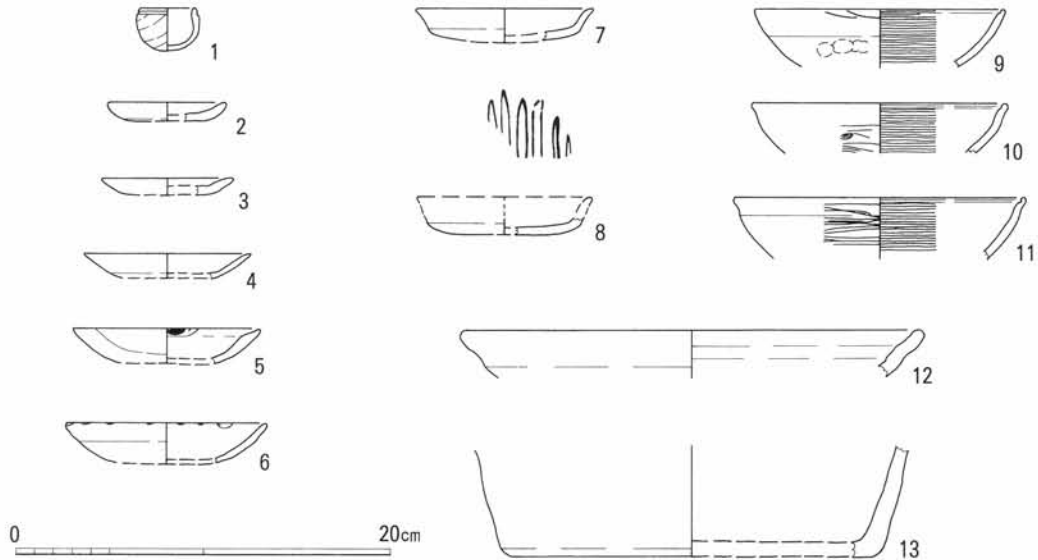
ピットは深さが数cmのものがほとんどで、一部は直線的に並ぶものもあるが、建物としてはまとめきれなかった。しかし、柱穴状のものもあり、見張り台のような小規模な建物があったであろうことは十分考えられる。

地山の傾斜をみるためにトレンチ西壁沿いに断ち割りを入れたところ、明黄灰褐色土内から12世紀末に比定される瓦器がみつかった。この層は平坦地を拡張した際の造成土（整地層）と理解できる。

なお、将来の調査に備え、同志社大学の協力を得てトレンチ北側にある学校地内に、トレンチ中央南北ラインの延長をプラスチック杭で設けた。

4 出土遺物

今回の調査でみつかった遺物は、土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器・銭貨（治平元宝）などで、量的には整理箱につめて1箱に満たないほどである。土器片等いずれも小片が多い。時代的には、整地層からみつかった平安時代末頃のもの、黄褐色砂質土（遺物包含層）からの16世紀代のもの、表土付近からの近世～近代のものにわけることができる。



土師器 小ツボ (1)、皿 (2)～(6) 瓦器 皿 (7)・(8)、碗 (9)～(11)、鉢 (13) 唐津焼 折皿 (12)

遺物実測図

1は溝状の土層からみつかった土師器の小ツボである。16世紀末に属する。

2～6は包含層からみつかった土師器の皿である。2・3は厚手の皿で口径6.2cmと7.0cm。5・6は口径10.0cmと10.6cmで、灯火器として使用されている。同じく16世紀末に属する。

7は包含層からみつかった瓦器の皿。口径9.2cm。

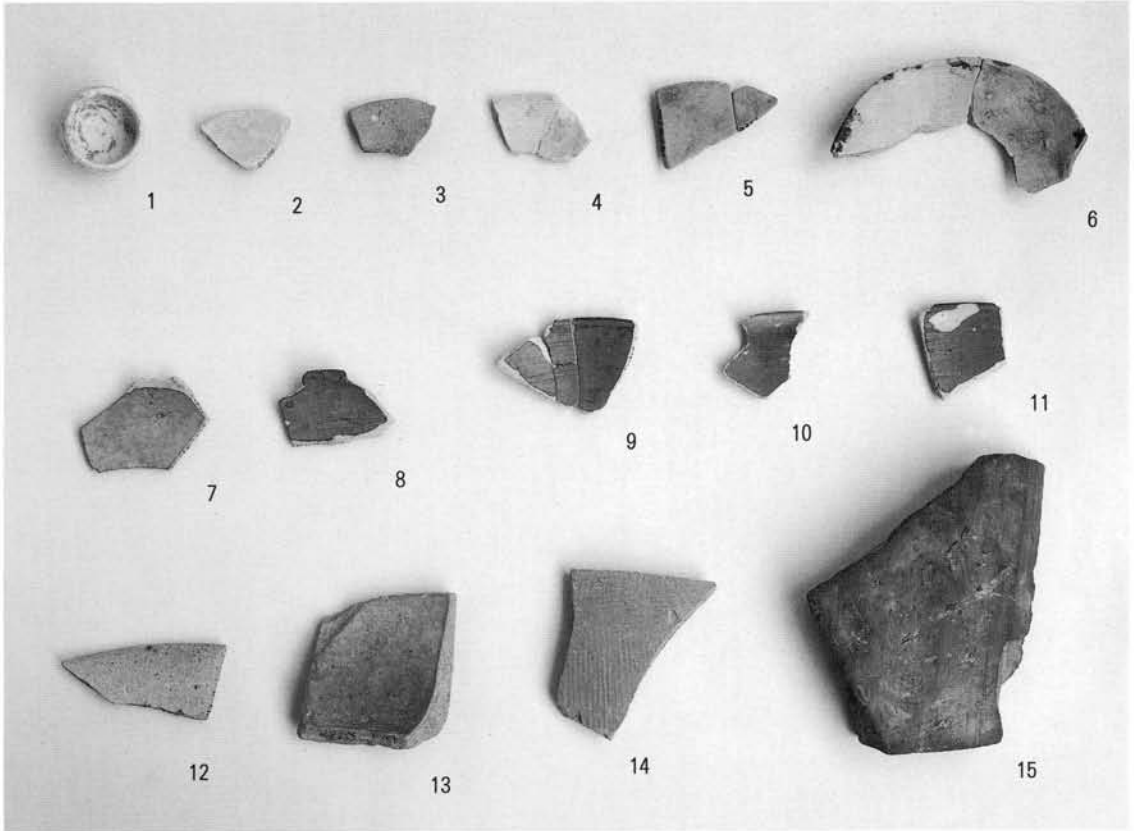
8～11は整地層からみつかった瓦器である。8は皿で内面にジグザク状の暗紋を施す。9～11は碗で口径13.2～15.4cmをはかる。内面にはヘラミガキが密に施される。7～11の瓦器は12世紀末頃のものである。

12は唐津焼の折皿である。口径24.4cm、表土層からみつかった。

13は同じく表土層からみつかった瓦器の鉢である。12・13はともに16世紀末頃のもの。

14は須恵器のカメの体部である。

15は平瓦である。普賢寺との関係であろう。



出土遺物

5 まとめ

今回の調査は新宗谷遺跡の最先端の小削平地で行ったものであり、丘陵全体に広がる遺跡の全体像をつかんだものではない。しかしながら、調査の成果は遺跡全体や普賢寺谷の歴史を考える上で重要な事実を得られたものといえよう。

今回の調査では、新宗谷遺跡は大きく2時期にわけることができた。得られた成果を時代背景に照らしてまとめにかえる。

小削平地西側の整地層からみつかった瓦器の年代は12世紀末頃である。この頃の普賢寺谷には、地名の由来となる普賢寺があり、奈良興福寺関連の寺として権勢を誇っていたとみられる。そのためか治承4年(1180)、平重衡が南都焼討ちの際に普賢寺にも乱入して寺を焼いたと伝えられている。このような源平争乱前夜からの政治的緊張を背景に一般集落等の自警的な見張り台等の施設がこの丘陵上に存在した可能性がある。しかし、それが具体的にどこの場所になるのか、どの程度のものかは不明である。今後の調査の課題となろう。ここから南西約700mに位置する小田垣内遺跡でも、同時期の遺物がみられ、仮設的な施

設の存在が推定されている。谷を挟み両側に同様の施設が何か所か存在したことになるろう。

15世紀代の普賢寺谷には多くの地侍がいて、それぞれ小規模な城館を構えていたとみられている。彼らは「普賢寺衆」ともよばれ、惣氏神の朱智神社や惣氏寺ともいえる普賢寺を中心とした結束がみられる。

応仁・文明の乱では東軍に属し、西軍の河内方との戦いをくり返している。

永禄8年(1565)、三好党の兵乱により普賢寺は炎上する。永禄11年に織田信長が入京し、畿内はほぼ1か月で平定されたが、普賢寺衆は抵抗を続ける。しかし、永禄12年には信長により彼らの多くは切腹を命ぜられている。

調査地の遺物包含層からみつかると器類はほぼ16世紀末頃に比定されよう。また、みつかった遺構のなかには柱穴になるものもあり、掘立柱建物あるいは柵列が存在したものとみられる。

16世紀後半の織田信長による普賢寺谷に対する壊滅的な打撃以降のものと考えられる。

《参考文献》

鈴木重治・松藤和人『京都府田辺町都谷中世館跡』（『同志社大学校地学術調査委員会調査資料』No.11
同志社大学校地学術調査委員会）1977

高橋美久二「田辺町普賢寺の大西館」（『山城郷土資料館報』第7号 京都府立山城郷土資料館）1989

伊野近富「京奈バイパス関係遺跡昭和63年度発掘調査概要（小田垣内遺跡）」（『京都府遺跡調査概報』
第37冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1990



平成6年3月30日 印刷

平成6年3月31日 発行

新宗谷遺跡発掘調査概報

(田辺町埋蔵文化財調査報告書 第18集)

編集・発行 田辺町教育委員会

〒610-03 京都府綴喜郡田辺町

大字田辺小字田辺80番地

電話 07746-2-9550

印刷 明新印刷株式会社

〒630 奈良市南京終町3丁目464番地

電話 0742-63-0661

(表紙 調査地から普賢寺谷入口をみる)

(裏表紙 厚生年金センターから調査地をみる)